和歌山県
ワーク・ライフ・バランス
事例集

わかやま勤労者マルチライフ推進ネットワーク

はじめに

この事例集には、和歌山県内各地の「ワーク・ライフ・バランス」事例を 12 事例、収録しています。「ワーク・ライフ・バランス」は一口で説明するのはなかなか難しいキーワードですが、一般的には「仕事と家庭の調和」といわれます。言葉だけを見るとややもすると難しいことのように思われる方も少なくないのではないでしょうか。「仕事が忙しくて、地域のこと、家庭のことなどに時間が割けない！」そんな声も聞こえてくるかも知れません。

本事例集では、広い和歌山県内の北から南まで、全域から事例をピックアップしました。また、取り組まれている団体も NPO やボランティア団体だけではなく、企業が応援している団体、地域に古くから残る文化を守ってらっしゃる団体までバラエティ豊か。通年取り組まれているものから、年 1 回の活動まで、活動の回数も様々です。

多様な活動をご紹介させていただくことで、「これならわたしにもできそう」「このような活動はうちの地域にもある！」・・・そんな気づきを得ることができれば、と願っています。

この事例集が、みなさんの活動の参考になれば幸いです。

また、取材にご協力下さいましたみなさまに厚く御礼申し上げます。

2015 年 3 月

わかやま勤労者マルチライフ推進ネットワーク

1. うなばら奉仕団

ご安全に。

奉仕団・湊団長

「うなばら奉仕団」は、日鉄住金物流株式会社内の任意団体として、現在では 2 ヶ月に 1 度、和歌山市内の清掃活動を行っています。この奉仕団活動は歴史がある活動で、昭和 50 年に伊勢の国民道場「神道月例会」に参加した仲間が、奉仕団活動を立ち上げて現在に至っています。

現代表の湊さんは最近、出勤途上にて、あるおばあさんが道を掃除している場面を見ることがありました。その道は明らかにどこかの家の前というわけではなく、おそらくおばあさんは、近所の清掃を行っていたようでした。うなばら奉仕団が目指すものは、まさにこうした「汚れているので掃除」「ゴミが落ちていたから拾う」といった当たり前の行為を、当たり前のように行う精神を養うことにあると考えています。それは、義務感や、使命感といった重いものではなく、何とないように行えれば十分と思っています。そしてそのような気持ちがこの活動を通じ、みんなに根付けばいいと希望して活動を続けてらっしゃいます。

港祭り花火大会翌朝の清掃

1 年間の活動の中で最もやりがいがあるのは、毎年約 3 万人の観覧者がある花火大会「湊祭り」翌朝の清掃。屋台で買ったであろう焼きそばやベビーカステラ、たばこに空き缶などのゴミが辺り一面に溢れ、異様な匂いとカラスがうろつく中で清掃活動がスタートします。一見、目を覆いたくなるような景色ですが、新日鐵住金和歌山製鐵所や関係協力会社の方々も協力し、100 名ほどで清掃すると、30 分で見違えるように綺麗になるといいます。参加者に話を聞くと、「ごみ袋 1 つでは拾いきれないくらい大変だが、その分やりがいがある」、「自分の町は自分で綺麗にしたい」と答えてくれるそうです。月曜日の出社前にも係わらず、参加してくださる方々にはすごく感謝されているそうです。

経営が厳しい時代に存続の危機もありましたが、なんとか乗り越え 40 周年。ボランティアでの清掃活動が評価され、これまでに国・地方自治体・外部団体・和歌山製鉄所長などから数々の賞を受賞。今では会社の看板を背負った活動になっています。今後 50 年、100 年と継続していけるように更なる活性化を図っていきたいと考えておられるそうです。

海水浴場等の清掃も実施

うなばら奉仕団 | （連絡先）日鉄住金物流株式会社和歌山支店内
和歌山市湊 1850

2. 木ノ本の獅子舞保存会

木ノ本の獅子舞は、和歌山市の北部にある木本八幡宮の例大祭に神様に対する感謝と祈りの心をこめて奉納される神事芸能です。歴史は 500 有余年、長い間、いろいろな障害をひとつひとつ克服して遂に今日まで継承されてきた行事で、和歌山県指定民俗無形文化財に指定されています。

獅子舞は 10 月 14 日以後の日曜日の本祭と前日の宵宮祭の両日に、木本八幡宮の権殿前の広場で奉納されます。獅子は雄獅子で、青年 2 人が胴衣に入って演じ、笛や太鼓、チャンガラ（鉦）のお囃子が盛り上げる勇壮活発な獅子舞です。

ダンジリ上の毎

舞は「地上での舞」と「ダンジリ上での舞」があります。地上での舞は、敷き並べたむしろの上で「龍の舞」「孔雀の舞」「鶴亀の舞」「ねんねんころり」「居眠り」「股ねずり」などを演じます。ダンジリ上での舞では、地上 5 メートルの所に渡した 2 本の青竹を足場として舞を披露するもの。相当な修練を重ねる必要があり、まさに郷土の誇るべき伝統無形文化財です。

保存会の笹山会長にこの素晴らしい伝統を守るための苦労話や方策についてお話を聞くことができました。

保存会笹山会長

練習は例祭日の 2 週間前から連夜にわたって行います。舞い手の確保や指導者の高齢化等、いろいろな課題がありますが、500 年以上の歴史がある伝統の獅子舞を守って行くためには、舞い手を育てて行く事が一番の課題です。

現在、舞子を舞えるのは木ノ本西地区の若い男性だけ。伝承者を育てるために子ども獅子も近年始めていますが、わかものが県外に就職・進学することも多く、伝承者不足とその対策が課題です。今後は地区以外の氏子の若者にも広げていくことも検討する必要があると考えているそうです。

熱のこもる練習

練習は本番までの間、連日連夜遅くまで行われます。笛と太鼓と鉦のお囃子を担当する人、それに合わせ舞い手が練習します。舞い手の動きに先輩から「足の運びはこうだ」「腕の振りはこう」と手取り足取りの指導。その指導に、教えてもらった舞い手は元気よく「ありがとうございました」と礼儀正しく返事を返す、実にすがすがしい気持ちのこもった練習風景。練習は日ごとに厳しさと激しさを増し、互いの真剣さが伝わってきます。

特にダンジリ上での練習の舞は命がけ。5 メートルある高さでの舞には命綱なし、2 本の青竹の上を舞い手は動き廻ります。この木ノ本獅子舞は本当にすごい、そしてすばらしい、今まで経験したことのない感動を味わえます。

保存会のみなさんの熱い情熱と深い郷土愛に感銘を受けました。

木ノ本の獅子舞保存会　（連絡先）木本八幡宮　073-451-5915

3. パパチカ

和歌山市を中心に活動している「パパチカ」。和歌山では珍しい、父親主体のいわゆる「イクメン」のみなさんによるサークルです。さて、どのような活動をおこなっているのでしょうか。

「パパチカ」は 2013 年 2 月に 4 名で結成されました。もともと「わかやま･力（ちから）プロジェクト」というグループで加太や磯ノ浦などの清掃活動をおこなっていたことから、パパの力「パパチカ」と命名したのだそう。和歌山市が発行している「和歌山市父子手帳～和歌山・男の子育て指南本～」の制作にも携わったり、和歌山市内の子育て支援サークルとも関わりもあったりしたことから、父親同士が集まって子育ての悩みや育児経験の共有を目指す目的で結成されました。

その後、少しずつ人数が増え 15 人に。なにか事業ができないか、と考えたときに、楽しみながら和歌山のことを知ってもらうために和歌山市の名物を塗り絵にしてはどうか、というアイディアが浮かんできました。

2013 年度、この塗り絵制作事業が和歌山市が実施した「わかやまの底力・市民提案実施事業」に採択されたことで事業は一気に進みます。月 1 回、メンバーが集まって作戦会議を開き、イラストレーターの協力で生産量全国 2 位の新ショウガ、加太の鯛、布引の大根などの塗り絵を試作。子ども対象のイベントに持ち込んで反応を探ったところ、手応えを感じたといいます。イベントには B0 サイズという巨大な塗り絵を持ち込みました。B0 サイズは家庭用のプリンタではもちろん印刷できませんので、メンバーが勤務する会社の業務用プリンタを借りて出力したそうです。冊子の印刷以外はほぼグループのなかで作業ができ内製化することができるのがパパチカの強み。それぞれの得意分野を少しずつ持ち寄り、事業を進めていったそうです。

様々な塗り絵が用意されています

イベントで巨大塗り絵に挑戦！

パパチカの運営方針には「集まれるときに集まろう」というモットーがあるそうです。各々仕事をもちながらの活動なのでどうしても無理がでかねません。「塗り絵をつくる」という具体的な作業があるので集まりやすいという事情もありますが、無理強いをするのではなく、メンバーで役割分担をして過度に負担がかからないように工夫しているといいます。

仕事ではつながることはできない様々な分野の方と出会いつながることができているのがうれしい、と話してくれました。塗り絵は今後も制作を続けていき、次の和歌山を担う子どもたちに楽しんでもらえるよう、事業を組み立てていきたいとも。パパの力が子どもの力に、そして今後の和歌山の力になることでしょう。

パパチカ ブログ　http://papachika.ikora.tv/　（文中の写真はブログから引用）
Facebook　https://www.facebook.com/papachika.wakayama

4. 和歌祭実行委員会

「権現さん」といわれる紀州東照宮。徳川家康を祀っている東照宮を中心に毎年 5 月に開催されるのが「和歌祭」。1622 年から始まったとされる歴史のある祭りです。一時、和歌山市の商工祭りのなかに演目が組み込まれた時期がありましたが、再び和歌浦周辺地区で開催されるようになりました。この背景には、地域住民が中心となって結成された和歌祭保存会、和歌祭実行委員会の存在があります。

和歌祭には「株」というものがあります。もともと和歌祭には 60 を超える演目があるのですが、その演目は「株組織」として独立しています。独立した株組織による演目の集合体が「和歌祭」を構成しています。株組織はそれぞれの演目、そして技術を後継者に伝承していく役割を担っているのですが、高齢化などで後継者への継承が困難になり始めました。そこで、和歌祭保存会青年部のメンバーが株組織に「弟子入り」し、その技術を習得していくようになりました。後に青年部が「和歌祭実行委員会」と名を改め、和歌祭運営に必要な取り組みを進めることになりました。

紀州徳川家に関わる祭りではありますが、当時から一般民衆も関われる祭りだったことが 400 年近く続いた理由ですよ、と実行委員会の保井前会長が教えてくれました。明治時代には裃（かみしも）姿になんとシルクハットをかぶって演舞する様子が記録されているとか！いまでいう「ゆるさ」も許容されていたのかもしれません。

紀州東照宮と御輿

これだけ歴史のある祭りになると様々な苦労が出てきます。一部の演目は途絶えてしまいましたし、御輿など祭りに使う様々な道具も老朽化してきます。途絶えた演目のなかで「御船歌（おふねうた）」は和歌山大学などの研究などによって過去の記録がみつかり見事に復活しました。祭りに使う道具は、歴史あるものだけに修繕費用もかさみます。実行委員会などが中心となって協賛金や寄付金などを得て修繕したりレプリカを作ったりといった並々ならぬ苦労を重ねています。また行列で演者がかぶる仮面「百面」の制作について地域の古老から学ぶ取り組みも続けています。

学生も和歌祭の準備に参加！

実行委員会の中山委員長は、400 年近くという日本でも有数の歴史を誇る祭りですので、もっと若い人に関わってもらい魅力を感じてほしいと話しています。最近では地元だけではなく和歌山市内各地から参加者を募っています。是非、次回はあなたも歴史を体験してみませんか。

和歌祭実行委員会
（連絡先）和歌山市和歌浦西 2 丁目 1-20　東照宮会館
TEL.073-444-0808　http://wakamatsuri.com/

5. 和歌山城からはじめよう！みんなにやさしい和歌山をつくる会

和歌山市のシンボルといえば「和歌山城」。和歌山市民だけではなく、和歌山市に観光に来られる方の多くがこのお城を訪ねてこられます。

「和歌山城からはじめよう！みんなにやさしい和歌山をつくる会」、通称「やさわか」は、私たちの和歌山城を中心に多くの市民が集い、お互いを認め合い、支え合いながら共に成長できる場として活用し、誰もが楽しめるやさしい和歌山にしていく事を目的に設立しました。さらには、県外から来られる方に、お城を中心とした和歌山市内で楽しんで「また来たい」と言ってもらえるような、バリアフリーを含めたユニバーサルな地域にするために行動していきたいと考えています。「やさわか」はこのような趣旨に賛同した、企業、大学、建築、NPO、弁護士、経済団体等、様々な職種・肩書きを持つ有志が集まっているのが大きな特徴です。

なかでも、戦災などの被害を受けた和歌山城が市民の力で再建されてから 55 周年にあたる 2013 年に「お城再建 55（ゴーゴー）フェスタ」を開催。

みんなで再建 55 周年をお祝い！

思い思いに和歌山城を楽しみました

みんなで再建 55 周年をお祝いし、和歌山城が歴史的にも素晴らしい「宝」であることを再確認するとともに、和歌山には色々なことに挑戦し、努力している人々がいるという事を市民はもちろん県外の人々にアピールしました。

車いすの方を城内に案内する登城サポートも実施

今後は、自分たちの地域に誇りを持ち、市民一人一人がお国自慢の出来る子どもたちをみんなで一緒に育てる社会を目指して、盛りだくさんの企画をしていきたいと思います。

和歌山城から「しあわせのタネ」を飛ばそう！

和歌山城からはじめよう！
みんなにやさしい和歌山をつくる会

和歌山市北ノ新地 2-22　キューブ建築研究所内
http://834wakayama.web.fc2.com/

6. 山東まちづくり会

和歌山市南東部、わかやま電鉄貴志川線沿いに広がる山東地区は、タケノコやミカン、イチジクなど農産物の生産が盛んな地域です。貴志川線の再生などもあって脚光を集めている地域の魅力を発信しようと 2009 年 7 月に地区の住民約 10 名で立ち上げたのが「山東まちづくり会」です。現在では 20 代から 80 代まで約 60 名が会員として登録されています。

四季のイベントに参加した方が会員として関わるようになり、学生・主婦・勤労者・退職した方など様々な方が関わっているのが特徴。県外から山東地区に移住された方も加わっており、外部の視点からみた山東のよさを発信するのに役立っているとか。現役世代の方は平日の日中はなかなか動くことができませんので、比較的時間に余裕がある退職者の方がその時間帯に業務をこなすなど、役割分担も考えられています。

イベントには他府県からの観光客も

この団体はなにかと「ゆるい」のが特徴。無理なく活動が継続できるように「無理はしない・させない」というのが特徴。概ね季節に 1 回、イベントをおこなっていますが、そうしたイベントの企画などは月 1 回会員が集まる会合でアイディアを出し合って企画・立案していくのだそうです。

「ゆるい」といえばご当地キャラ「たけのこマン」の存在も忘れるわけにはいきません。親しんでもらうためのキャラをつくろうという話をしていたときに、デザイナーを目指していた女性と偶然出会ったことがきっかけでキャラクターデザインを依頼。できあがったキャラクターを元に美術教師の方が予算 1 万円で発泡スチロールを切り出して頭とベルトを作成したたけのこマンは「きもかわいい」キャラクターとして人気を集めました。

噂のたけのこマン

四季のイベントも全国的に知られるようになり他府県からの出店も増加中。たま駅長にちなんでネコの写真を募集する「にゃんこ写真コンテスト」も全国各地から応募があり、受賞した北海道の方が作品を掲示しているわかやま電鉄にわざわざ乗車しに来られるなど、反響が広がっています。

また、地元の商店主などの協力を得て、地域資源を活かした商品開発もおこなっています。イノシシの被害があることからシシ肉バーガーを制作してもらい、販売したところ 1 日 150 ～ 200 袋を販売したとか。地域の資源を上手につなぐ役割を担っていきたいと話しています。

今後はイベントだけではなく、地区でも増えている空き家や耕作放棄地対策にも取り組んでいきたいそうです。ゆくゆくは他府県から山東地区への移住の受け入れもしたい、とモデル事業にもチャレンジ。山東地区のよさを発掘し他地域に発信し続ける山東まちづくり会の夢はますます広がります。

山東まちづくり会　和歌山市木枕 27-1
メール　sandomachikai@gmail.com　ブログ　http://sandomachikai.ikora.tv/

7. 貴志川線の未来を“つくる”会

ネコ駅長で日本、いや世界にその他を知られている和歌山電鐵貴志川線。世界に知られるようになる前の平成 15 年 11 月、当時運営していた南海電鉄が赤字を出し続けている貴志川線の廃止を発表。そこで沿線住民の有志 7 名（会社員・公務員）が中心となって地域の人たちに通勤・通学・通院などに利用されている公共交通機関が廃線になると生活に重大な支障を来すことを説明。存続の必要性を訴え、チラシを配ったり、幸せの色でもある黄色ののぼりを駅に立てたり、駅の清掃などの活動を行いました。

翌年 9 月の NHK「ご近所の底力」で廃線で困るのは沿線住民であることが全国放送され、貴志川線の廃線問題が全国に知られることになりました。また住民フォーラム「乗って残そう貴志川線」を沿線の高校の体育館で開催、関心を寄せる住民でいっぱいになり、貴志川線「存続」への大きな力となり、「貴志川線の未来を“つくる”会」の結成につながりました。そして、平成 17 年 2 月には会の活動などの成果もあり、行政支援も得られ、貴志川線の存続が決まりました。

クリスマス電車でプレゼントを

平成 18 年 4 月より、和歌山電鐵による新生・貴志川線の運行が開始され、鉄道ファンなら誰もが知っている水戸岡鋭治さんのデザインによる「いちご電車」「おもちゃ電車」「たま電車」などがのどかな農村風景のなかを走っています。

存続が決まってからは「永　続」へとさらに住民主体で貴志川線の応援団として様々な活動を年間約50回、続けています。また、毎月第 2・第 4 土曜日の 19 時から定例会を開催し、応援団としての活動の幅を広げる努力を続けています。

地域の協力も得て開催しているじゃがいも掘り

行政の支援を得て存続できた貴志川線。しかし、年間 250 万人の乗車人員がないと収支の均衡が取れません。沿線住民が 1 年間にあと 4 回多く乗車すればそれが達成できるので和歌山電鐵では「250 万人祈念あと 4 回きっぷ」を発売しています。つくる会もそれに協力し、活動を行っています。

これからも「永続」を合言葉に和歌山電鐵と協力し、様々な住民参加の楽しい行事を開催することを通して、応援団として地道な活動を続けていきます。

【主な行事】駅の清掃、駅舎のペンキ塗り、沿線への桜の植樹、じゃがいも・たけのこ掘り、子ども電車教室、クリスマス電車、駅舎へのイルミネーション、貴志川線祭りなど。

貴志川線の未来を“つくる会”
和歌山市伊太祈曽 558（伊太祁曽神社 内）
TEL　073-478-0053　FAX　073-478-0998　http://kishigawa-sen.jp/

8. 健康生きがいづくり一座

みなさんに質問です。「健康」が大切ですか、「生きがい」が大切ですか、どうでしょう？

どちらも大切です。健康で生きがいをもって毎日を過ごす。生きがいがあるから健康でその生きがいに向かって毎日を過ごす。どちらの考えも「あり」です。そんな目標を掲げて 2000 年に健康生きがいづくりアドバイザーの資格を持つ人が中心となって設立。地域コミュニティで笑顔を届ける活動を行っているのがこのグループです。

フラダンスの披露

高齢者施設、障がい者施設、地域の高齢者の集まりの会、公共施設のイベントなどで参加者の方々他とのふれあいを大切にしながらメンバーも一緒に同じ時を楽しむという活動と交流を行っています。交流のなかで一緒に歌ったり手拍子を打ったりして参加者の方々が心を和ませ、笑顔で楽しんでくれることが、メンバー一同の励みになり、顔晴って（がんばって）活動を続けています。

メンバーは男女合わせて 30 名あまり。懐かしの歌謡ショー、フラダンス、楽器演奏（サクソフォーン、二胡）、南京玉すだれ等盛りだくさんの内容です。参加者の方々と一緒に楽しめ、笑顔になれ、元気になれると毎回活動に加わるメンバーも多くいます。活動を行うことで「生きがい」を見つけ、そのために「健康」でありたい。「健康」であるから活動に参加でき、それが「生きがい」につながるという好循環になり、ますますこの活動が盛り上がります。

サンタクロースも一緒に二胡?!

2013 年 10 月には、2011 年 9 月に台風 12 号で大きな被害を受けた新宮市熊野川町での復興イベント「ふれあい公演」に参加。会場の熊野川保健センターさつきは大勢の地域の方々で埋めつくされ、メンバーの得意な技が次々と披露され、会場は出演者と地域の方々が一体となって盛り上がり、笑いの絶えない時間となりました。

活動範囲は県内のみならず、県外からも声がかかります。これからもメンバーの得意な技を舞台で披露し「健康」と「生きがい」をみなさんに届けてくれるでしょう。

こちらは南京玉すだれ

健康生きがいづくり一座
（連絡先）和歌山市岩橋 729-6　社会福祉コミュニティ総合事務所
E-mail　tarosaku54321@yahoo.co.jp

9. 橋本ちんどん笑会

橋本市は和歌山県の北東端。大阪のベッドタウンとして開発が現在も進められています。

そんな橋本市内の様々なイベントを盛り上げる「ちんどん屋」のようなものが組織できれば…という当時の市長の考えが形になったのがこの「橋本ちんどん笑会」。現在では年間で 20 回程度、市内のイベントや老人福祉施設などの慰問などに参加しています。

アコーディオン、フルート、サックス、クラリネット、チンドン太鼓、三味線などの楽器による曲の演奏のほか、ピエロや風船、シャボン玉遊びなどの芸を披露しています。

練習拠点はなんともレトロなこの建物

現在、会員は 40 人程度。年齢層は 20 代から 70 代と幅が広く、業種も違えば楽器や芸の腕前もみんな異なりますが、みなさん楽しみながら芸を磨いています。楽器を担当される方は、学生の頃に何らかの楽器を演奏した経験のある方が多いのですが、その経験がなくても打楽器などを勉強して参加されている方もいらっしゃいます。また、南京玉すだれ、風船遊びなど演奏以外の芸を見よう見まねで学んで活動に参加している人も少なくないといいます。

演奏のレパートリーは約 10 曲で現在も徐々に増えています。学生の頃にちんどんサークルで活動経験のある会員さんがいて、演目の選定や全体の指導をおこなっています。また渉外担当の会員さんが出演依頼や日程調整などの担当を担うなど、各々ができることを役割分担しておこなっています。

和気あいあいとした練習風景

なかにはイベントへの出演を通して地域の方と仲良くなり、それが仕事に生かされている方もいらっしゃいますし、劇団に所属して京阪神で活躍されている方もいらっしゃるとか。本当にいろんな方が参加されています。

「ちんどん屋」といえば、白塗りの派手な化粧が定番ですが、メンバー曰く「化粧のおかげでいつもと違う自分を出すことができる」そうで、「人前で演奏や芸を披露することが恥ずかしいなんて思わなくなります（笑）」。慰問では、お年寄りにとって懐かしい楽曲を演奏し想い出に浸ってもらうのが中心ですがなかには涙を流して喜んでくれる方もいて、みなさんも感動されるとか。

化粧や楽器の音合わせなどの準備に長い時間がかかるので、橋本周辺での活動に限定しているそうですが、管楽器ができる方を募集し、演目のバリエーションを増やしていきたいそうです。

橋本近辺の方、この機会に、いつもと違う自分を見つけてみませんか？

橋本ちんどん笑会
（連絡先）橋本市隅田町芋生 1-3　髪倶楽部上田　　TEL 0736-32-1234
Facebook　https://www.facebook.com/hashimotochingdong

10. よみきかせオヤジの会

御坊市のボランティア団体「よみきかせオヤジの会」は、お父さんたちが子ども達に読み聞かせ活動をしている団体です。6 年前より活動を始め、御坊・日高地方の保育園や幼稚園・小学校・学童保育への訪問を中心に行っています。読み聞かせを通じて、子どもたちに「相手の気持ちになって考えること」の大切さを伝えています。

屋外での公演のようす

この会の発足のきっかけは、代表の中西さんの子どもの様子から。子どもがゲームばかりして遊んでいるのを見て「たまには本も読んでほしい」と、絵本の読み聞かせをしたところ、それが好評だったそうです。当時中西さんは地元の青年会議所に所属していたことから、最初は青年会議所の企画として読み聞かせを始めました。「オヤジが本を読めば子どもとの共通の話題ができ、家族の楽しい時間が増える」と、自分の家庭を大切にしたい「オヤジ」たちが集まって活動していくうち、団体としての実績も蓄積されていきました。

絵本は、「オヤジ」達が好きなものや「おもしろい！」と思った本を選ぶそうです。食べ物で例えるとママが読む本は「栄養満点の食事」であるなら、オヤジが読む本は「駄菓子」、つまり、少しくだけた内容の本が多いということです。オヤジならではの目線を大切にし、読み方も工夫しています。2012 年には、東日本大震災の被災地でも読み聞かせを行い、津波の体験談を参考に「ぼくはにげた」という紙芝居も制作しました。災害時のリアルな描写もオヤジらしい作品になっています。学校や学童保育で披露され、子ども達の反を呼んだそうです。

「ぼくはにげた」原画

団体が今感じている課題は「教育格差」だそうです。これからは子どもたちが平等に本に触れられるよう、学校への訪問を強化していくそうです。40 代の働き盛りが中心の「オヤジ」たち。もちろん仕事も大変ですが、父親の育児参加のモデルを目指し、日々活動を続けています。家庭の子育てから地域ぐるみの子育てへ、オヤジたちの挑戦は今日も続いています。

幼稚園での紙芝居

よみきかせオヤジの会
（連絡先）御坊市薗 350-28　御坊商工会館 3 階　御坊青年会議所内
TEL　0738-22-5434　FAX　0738-23-2850　http://ameblo.jp/ehonist2009/

11. 上富田町民創作劇実行委員会

「彦五郎」という人物の伝説をご存じでしょうか。度重なる洪水に見舞われていた、いまの上富田町で、困った住民が氏神様から「人柱を立てれば洪水は静まる」というお告げを受け、彦五郎という人物が堤に身を沈めたことにより、以来その堤防は決壊することがなくなった、という伝説です。

上富田町で、芝居を通じて地域が元気になれないか、という約 10 名の有志が「上富田町民創作劇実行委員会」を立ち上げました。10 名は公務員、会社員、農業従事者など幅広い層から構成されていました。町外で演劇経験のある方もいらっしゃいますが、出演者、脚本・演出のスタッフ含めほとんどが演劇は初めて。しかし 2009 年に総勢 20 名で第 1 回公演として「彦五郎物語」を上演したところ、会場となった町民文化会館は 800 名を超える観衆で埋めつくされ、大好評のうちに終了しました。

町内でこのような演劇が開催されたことは大きな反響を呼び、いまでは文化会館事業として位置づけられました。2012 年は「義民・三兵衛」という新作を上演しましたが、2011 年の紀伊半島大水害があったこと、再演の要望が多いことなどからほかの年は「彦五郎物語」の上演をおこなっています。

この創作劇には、子どもから年配の方まで幅広く参加できるのが特徴。参加者の年齢や人数によって脚本を柔軟にアレンジしています。また田辺弁を前面に取り入れ、住民に親しみやすくしているのもポイント。ちなみに 2013 年の主役は演劇が初めてという青年！難しい役を好演しました。

実行委員会では毎年夏から参加者募集など準備を始め、秋から月 1 回のペースで発声練習などのワークショップを開催。年が明けてからは週 4～5 日、2～ 3 時間の練習時間が設けられます。とはいえ仕事を持っている方も多いので練習には「参加できる時に参加する」ことになっていますが、主役級を演ずる人は毎晩遅くまで練習に参加されるので「ワークライフバランスなんてあったもんじゃないですよ」と笑いますが、異なる職業・年齢の方がまるでひとつの家族のように演劇に打ち込むことができ、その過程に関われることに喜びを感じているのだとか。演劇が終わったあとの達成感は何にも代え難いものがあるといいます。

初期から実行委員に参画されている女性は「（生涯学習の目標の一つでもある）『人が地域で育つ』ということを実感しています」と当初の目標が達成されつつあることを話してくれました。初上演から 5 年、創作劇が町に根付き始めました。今後はこの創作劇をきっかけに新しいストーリーが次々と生まれることでしょう。

老若男女が揃った練習風景

上富田町民創作劇実行委員会
（連絡先）上富田町教育委員会生涯学習課
TEL　0739-47-5930　http://kamitonda-shibai.net/

12. しんぐう元気フェスタ

新宮市では毎年 3 月に「しんぐう元気フェスタ」が開催されています。もともと 2004 年から 06 年にかけて実施された、厚生労働省「勤労者マルチライフ支援事業」の一環として、企業人の社会参加を促進する「モデル事業」として始まったイベントですが、形を少しずつ変えながら、10 年が経とうとしています。今や新宮市内の初春の恒例行事になっています。

現在のフェスタの主催は新宮市ボランティア・市民活動センターと新宮市社会福祉協議会。ボランティア・市民活動センターには市内の NPO やボランティア団体が 100 団体以上参加していますが、活動しているのは女性と退職したシニア層の男性がメイン。現役世代の男性が少ないのが課題となっています。

毎年大賑わい！

フェスタに参加する企業は地元で商売をされており、社会参加のひとつとして出展されているケースが多いのが特徴。日頃から地域の NPO・ボランティア団体との接点がある企業もあります。2011 年 9 月に新宮を襲った大水害では企業として様々な支援活動をおこなった事例や、新宮市主催のマラソン大会に社員を運営ボランティアとして派遣する企業もあるそうです。また社員一人一人が地域の例祭などに参加するなどの地域活動をおこなっている事例も多々あるそうで、企業がボランティア活動に参加する素地はもともとある街だ、と新宮市ボランティア・市民活動センター運営委員長の西田さんは語ります。

新宮は人口 3 万強の小さな街ですが、小さな街だから連携がスムーズにいくかというのはまた別で、「元気フェスタ」では「みんなで楽しいことをしよう」をスローガンにして楽しい催しを持ち寄ることをお願いしているそうです。NPO やボランティア団体は日頃の活動を活かしたブース出展をしたり成果発表を、企業は自身の事業についてわかりやすく説明するコーナーや親子で楽しめる企画を、それぞれ出展しています。

これまで会場としていた施設が改築工事に伴い当分使えなくなることもあり、今後の開催形態は未定ですが、是非今後も継続をしていきたいと西田さん。フェスタを継続することで地域に様々な NPO やボランティア活動があることを知ってもらい、逆に NPO・ボランティア団体や来場者には企業活動を知ってもらい、楽しみながら新宮の NPO・ボランティア団体と企業を知っていただくきっかけになることがいちばんの目標。

住んで楽しい新宮にするには、新宮にある団体や企業を知ることも大事。そこから新宮への愛着がもっと生まれる。それがひいては来街者へのおもてなしにもつながる。小さい街だからこそ、あらゆる主体の「総働」を目指して、今後も活動は続きます。

みんなで記念撮影！

しんぐう元気フェスタ | （実行委員会連絡先）新宮市社会福祉協議会内
新宮市野田 1-1

わかやま勤労者マルチライフ推進ネットワークについて

「わかやま勤労者マルチライフ推進ネットワーク（勤マルネット）」は、2004 年から 3 年間、和歌山県経営者協会と和歌山県社会福祉協議会、わかやま NPO センターの三者が厚生労働省事業として実施した「勤労者マルチライフ支援事業」が母体となった、和歌山県内の「産・官・学・民」の連携組織です。

主に勤労者が企業等で働くことだけではなく、地域や家庭でも力を発揮できる「マルチな生き方」を推進することで豊かな人生を過ごせるように、という事業でしたが、現在では、産・官・学・民の緩やかなネットワーク組織としてそれぞれの強みを活かした連携事業を展開しています。

是非、みなさまもこのネットワークをご活用下さい。

和歌山県ワーク・ライフ・バランス事例集

発　行　2015 年 3 月
編　集　わかやま勤労者マルチライフ推進ネットワーク
〒640-8331　和歌山市美園町 5-6-12　特定非営利活動法人わかやま NPO センター内
電話　073-424-2223　FAX　073-423-8355
E-mail　info@wnc.jp
※ この事例集は、勤労者の地域参加を促進するしかけ作り事業（公益財団法人さわやか福祉財団助成事業）の一環として制作しました。